

わんや法難時の事情等においておやである。

流人僧潮音寺日照、三宅より神津へ島替、隆賢院日照として再起、師の動向・行状並不受清僧として忍難弘教の法悦に三宅・神津両島三十五年苦節を全うし齡七十七歳の生涯の一片でも確認出来た事を報告するに留めたい。

尚、神津島調査中流人墓地内に於て「栄学院日恕 元禄四年四月十日 身延武井坊」とある石碑を発見した。『身延山史』によれば、日恕は延宝七年二月廿一日身延山第三十世寂遠院日通遷化通師御遺言の後重飯高談林先聖一円院日脱上人晋山に対し反対派御園派と紛糾を生じ、依つて十月四日奉行所裁定、反対派十二名は御預け、追放、遠島の科を受く。この日恕は遠島組の一人であり、武井坊十三世であることが確認できた。詳細は後考を期す。

## 行学院日朝の研究

——中古天台の影響——

北 川 前 肇

行学院日朝（一四二二—一五〇〇）の教学は、教学史の

上で中古天台の影響を受けた理本覚的観心主義と称されている。しかし従来中古天台の影響は論じられていながら、具体的に如何なる流派の相承があったかについて検証されたことはなかった。ここでは、その流派の相承と朝師の思想教学への影響について報告したいと思う。

朝師は永享十二年（一四四〇）十九才の頃から約五年間星野山無量寿寺仏藏坊、即ち仙波談林で修学した。日蓮教団全史に仙波遊学の談義所を伝藏坊（三〇六頁）と記しているが、これは仏藏坊の誤りであろう。仙波の他に足利学校、真言宗鏡阿寺、京都、奈良、高野山等を歴訪し、俗学及び八宗十宗に亘る学問を修めた。その学問の広さは一代五時記・御書見聞等によっても明らかである。中古天台の影響を考えるとき、仙波での五年間がその中心であろうが比叡山遊学についても考える必要があろう。管見の朝師著作中に叡山遊学について論述した箇所は存しない。後世の別頭統紀には登叡を記し、執行博士は日蓮宗教学史で叡山において四箇年台密を修学したことを述べ、教団全史にも叡山遊学を記している。しかし、これらは如何なる資料に基づき叡山遊学を記述したのか明確でない。ただ真如院日住の『与中山浄光院書』（宗全十八卷）に、「今度身延ノ当住山門ヨリ下向候ニ入ニ御見参ニ真俗物語サスク之イハ

ワニ候カ心ニク、御座アルヤト申テ候」と朝師を讃めてい  
る文により、叡山に在ったことが窺える。

また朝師当時の教学者の叡山遊学を見ると、真如日住が  
二十一才のとき叡山東塔北谷虚空藏院藏乘坊の定源の許に  
笈を負うている。更に平賀日意は仙波へ赴き周防公と称し  
朝師と同学であった。その後比叡山東塔西谷の覚林房に居  
して定栄と名のり、三年間天台学を修した(平賀本土寺継  
図次第)。これらのことを考えると、朝師は仙波遊学を終  
えて登叡し、叡山も日蓮宗の学僧を受け入れていたことが  
窺える。そこで朝師の場合、天台学の内容は関東天台の仙  
波と、京天台の比叡山であったと考えられる。

朝師の所持本に見られる中古天台の書は、惠光房流口伝  
書の北谷秘典四卷、杉生流の心栄相伝二十五冊、一流相伝  
抄四冊、蔵田最種抄、修禅寺相伝私註などが存する。これ  
らのうち、一流相伝抄はおそらく仙波で相承したと思われ  
る。また朝師著作中に見られる流派の相承を整理すると、  
慧心流と檀那流の両流が相伝され、特に慧檀両流が分流し  
て形成された杉生流と惠光房流の相伝が頻度数からいって  
最も多く存している。

では朝師の教学に中古天台がどのような影響を与えたか  
について、願本論を考察してみたいと思う。

日蓮聖人は『開目抄』で爾前及び諸大乘經に応身・報身  
の願本はなく、法華經のみ三身の願本が説かれていると記  
されている。特に寿量品で伽耶始成の釈尊が開願されて、  
久遠実成が説示されているのであるから応身願本が正意で  
あるといえよう。朝師の開目抄見聞におけるこの文の解釈  
を見ると、法華本門には理性の三身法身、修得の三身報身、  
化他の三身応身があり、理性の三身法身が本門の色の三身  
無作三身の手本となると釈している。またこの無作三身に  
おいて、「一事成無作三身、二始本冥一無作三身、三唯本  
無作三身也」と述べ、一は始覚の重、二は本覚の重、三は  
不覚、理性、本理の重があり、第三の不覚、本理の法身に  
よって第二の報身、第二より第一の応身が起るといふ。  
つまり、根本を不覚に置き、これによって全性起修するこ  
とを説く法身願本論である。望月飲厚博士は、本理から始  
覚へと次第する願本論は、願本論本来の使命に背き、応報  
二身の根底としてその本地身を探求するのが報身願本、応  
身願本の理想であることを指摘されている。

この願本論の本理↓本覚↓始覚の構造に影響を与えたも  
のは、恐らく惠光房流の思想があったと思われる。本尊抄私  
記に惠光房流の相伝として上述の無作三身の文が記され、  
「今ハ唯本ノ重ナルベシ」と唯本無作三身の重が述べられ

ているのである。更に宗義に関する口伝書である当家朝口伝にも同様に恵光房流の義を相伝し、法身の重が説示されている。畢竟、朝師の顕本論においては恵光房流の影響があったことが理解されるのである。そしてその法界観を一瞥すると、不覚、本理を根本の理として事象から超出させ、その超出させた上で事象を根本理の顕現したものと<sup>すがた</sup>して肯定するのである。即ち現実の事象が真理の生きた相であることを強調し、事象乃至、事の絶対的肯定、自然主義に陥るといふことになるのである。

① 本尊抄見聞

## 本尊抄末註における受持の概念 (一)

庵 谷 行 亨

日蓮聖人遺文中、「受持」の語句の用例は二十有余篇四十有余箇所に及ぶ。その用例は、引用経論中や他の語句と並記等、様々であるが、最も注目すべき教義的用例は『本尊抄』の、いわゆる「受持譲与段」である。したがって、日蓮聖人の受持論を理解するには「受持譲与段」を中心に

考察を進めねばならないことは言うまでもない。

しかし、聖人滅後の諸先師による受持の概念を深ることには聖人の受持の概念を理解する一助となるであろう。聖人在世に近い日蓮門下の受持の解釈は、聖人の受持の概念を少なからず反映しているのではないかと予想されるし、あるいはまた、教学史上における受持の概念を明確にすることによって、聖人の受持論に取り組む自らの位置も明らかになると思われる。

以上の趣旨のもとに、日蓮聖人の受持論を研究する立場から、特に『本尊抄』末註を中心に日蓮教学史上における受持の概念を考察するものである。

望月徹厚博士著『日蓮聖人御遺文講義』第三巻には、大正十一年までの『本尊抄』の末註として七十三篇が挙げられている。しかし、掲載に漏れたものも多少あるようで、これに大正十三年以降のものを加えると、気づいたものだけでも百篇に及ぶ。この百篇の内、披見し得たものは五十篇であるが、その中には「受持譲与段」の解説の無いものや、注釈が未完のため「受持譲与段」に及ばないものが多少あり、実際に考察の対象になるのは三十有余篇である（今回は、都合により江戸中期頃入宝暦年間〓西暦一七五〇年代〓祖滅約四七〇年〓迄とし、以降は次の機会に譲